

第41回学校給食作文コンクール
& 給食に関する標語

入賞作品集



令和7年10月

苫小牧市学校給食会



「給食から学ぶ食育の大切さ」 〔審査を終えて〕

第四十一回学校給食作文コンクール及び給食に関する標語審査委員長

苫小牧市立明倫中学校長 池田 健人

毎日の給食には、子どもたちの笑顔と、たくさんの方の「ありがとう」が詰まっています。そのような毎日の中で『学校給食作文コンクール及び給食に関する標語』の応募作品には、苫小牧市の児童生徒の皆さんが給食を通して感じたこと、考えたこと、そして未来への願いが、言葉となって輝きあふれ出ていました。それは、おいしさはもちろん、食材を育てる人、調理してくれる人、給食を運んでくれる人、配膳する人などへの感謝の気持ち。友だちと一緒に食べる楽しさや、苦手な食べ物に挑戦する勇氣。どの作品にも、給食が「食べる」以上の意味を持っていることが伝わってきました。

今回入賞された皆さん、本当におめでとうございます。皆さんの作品は、給食への思いやりと感謝、そして日々の気づきが美しく表現されており、読む人の心をあたたくしてくれました。その感性と努力に、心から拍手を送ります。これからもその思いをたくさんの人に広げてほしいと思います。

また、この場をお借りして、生産者の皆様、調理員の皆様、栄養士の皆様、学校関係者の皆様など給食に関わるすべての方々、そして保護者の皆様に、心より感謝申し上げます。皆様のご尽力が、子どもたちの健やかな成長と、豊かな心を育んでいることを改めて実感いたしました。

これからも、給食を通して育まれる「食」の大切さや感謝の気持ち、子どもたちの中に根づいていくことを願っています。そして、作文や標語を通じてその思いを表現する場が、より多くの子どもたちに広がっていくことを期待しています。

☆第四十一回学校給食作文コンクール 入賞者

【最優秀賞】

- 一学年の部
光洋中学校 一年二組 高橋 知央「給食への思い」
- 二学年の部
開成中学校 二年一組 對馬 羽菜「ありがとう私たちの給食」
- 三学年の部
沼ノ端中学校 三年一組 清水野 凜音「給食という食育」

【優秀賞】

- 一学年の部
沼ノ端中学校 一年二組 保月 彩花「給食について」
- 二学年の部
啓明中学校 二年三組 幸谷 悠嗣「給食の魅力と努力」
- 三学年の部
啓明中学校 三年二組 鐘水 芹花「給食がつなぐ笑顔と感謝」

応募点数

中学校 4校

合計 36点

☆給食に関する標語 入賞者

【小学生の部】

- 拓勇小学校 一年三組 戸崎 春仁
- 清水小学校 二年一組 若狭 京志
- 沼ノ端小学校 三年一組 山本 祥也
- ウトナイ小学校 四年五組 小泉 瑠南
- ウトナイ小学校 五年一組 藤根 康祐
- 糸井小学校 六年一組 佐々木 光希

【中学生の部】

- 明野中学校 一年四組 野替 逞真
- 苦小牧東中学校 一年二組 道政 夏希

応募点数

小学生 841点

中学生 22点

合計 863点

目次

〔学校給食作文〕

《最優秀賞》

一学年の部 題名「給食への思い」
……4

光洋中学校 一年二組 高橋 知央

二学年の部 題名「ありがとう私たちの給食」
……5

開成中学校 二年二組 對馬 羽菜

三学年の部 題名「給食という食育」
……6

沼ノ端中学校 三年一組 清水野 凜音

《優秀賞》

一学年の部 題名「給食について」
……7

沼ノ端中学校 一年二組 保月 彩花

二学年の部 題名「給食の魅力と努力」
……8

啓明中学校 二年三組 幸谷 悠嗣

三学年の部 題名「給食がなくなぐ笑顔と感謝」
……9

啓明中学校 三年二組 鐘水 芹花

〔給食に関する標語〕

小学校の部・中学校部 入選作品
……10



給食の作文 最優秀賞

《二年生の部》

光洋中学校 一年二組 高橋 知央

「給食への思い」

今回は、私が学校給食への思いを私の心と一緒にお届けします。今まで六年と三ヶ月学校給食を食べてきて思っていること、分かったこと、考えたことが三つあります。

まず一つ目は、とても待ち遠しいということです。給食までは、授業を四時間受けないといけないし、中学生になつて、小学生のころよりも授業時間が少し長くなったからこそ給食の時間がとても待ち遠しく感じるようになりました。給食の食缶が教室に来て、当番の人が開けると、今日の給食はなにかな。と、とてもわくわくしながら見ています。



私の好きなラーメンやカレー、デザートが出たら、もう毎日興奮しています。

次に二つ目は、当たり前かもしれないけれど、栄養バランスが整っていてすごいなと思いました。毎月、月の給食の予定表が届き、見ていたら、その日の給食にふくまれている栄養がすごく細かく書かれてあつて、毎月、すごいな。と思いつつながら見ていて、魚がメニューに出てきた時は、「小骨に気を付けて食べましょう。」といったコメントも書かれてあつてすごいと思つたし、毎月、予定表を見るのが楽しみです。毎日、栄養たくさんさんの給食を考え、作ってくれている人たちに感謝を込めて食べています。

最後に三つ目は、すごくいいねいだと思いました。何個もの小・中学校の給食を作っているのに、とてもキレイなのがすごいと思えました。野菜はキレイに切つてあつて、ゴロッとしていないのがいいなと思いました。味はちょうど良いし、好きなものが多いので私は給食が好きで、とても美味しいです。

最後に、いつも大変だけれど、とても美味しい給食をありがとうございます。私は、副菜が苦手が残してしまうことが多いのですが、夏休み前の一週間は、副菜も食べきり、完食することができますようになりました。夏休みが終わった後も、給食を完食できるように頑張ります。

「ありがとう私たちの給食」

毎日当たり前のように食べている給食。それは実に多くの人々の努力と愛情によって作られて



いることを小学四年生の時の見学学習で初めて知った。苦小牧の東に位置する給食センターで見た光景は、まさに衝撃的だった。

給食センターに足を踏み入れてみると、まず目に飛び込んできたのは、数えきれないほど多くの人々が働く姿だった。そして、見たことのない大きさの調理器具の数々。普段、家庭で目にするものとは比べ物にならないほどの巨大な鍋や大型冷蔵庫が並び、そのスケールにただ「凄い」と、感嘆することしかできなかった。

その瞬間、毎日私たちのために、これほど多くの方々が生産の準備に携わっているのだと強く実感した。栄養バランスを考え、安全に配慮し、そして何よりも私たちが美味しく食べられるようにと、一つひとつの工程に愛情を込めてくださっているのだと感じた。

苦小牧の給食では、地元の苦小牧だけでなく胆振産の食材がふんだんに使われている。正直なところ、地元の食材だからといって、いつもの給食と味が大きく違うと感じることはあまりない。だが、今、口にしていく食材がこの地域の皆さんが心を込めて育ててくださった

ものだと思うと心が温まっていく。日々の給食を通して、生産者の方々への感謝の気持ちがより一層芽生え、地域の繋がりを深く意識することができると感じる。

そんな素晴らしい苦小牧の給食だが、この作文を書くまで、実は給食に対してある要望を抱いていた。それは、「もっと品数を増やしてほしい。」というものだ。時々、副菜がない日があると、苦小牧の給食への期待が大きい分、少し残念に感じていた。そんな思いを抱えながら、一日当たりの給食費を調べてみて本当に驚いた。七月は一日当たり三百八十円だという事実気づいた。給食の牛乳がスーパーではおよそ百円することを考えると、残りの汁物や主食、おかずが三百円程度で作られているということだ。この限られた費用の中で、いつも美味しく、そして、これほどまでにハイクオリティな給食を提供してくださることに、私は圧倒されるばかりだ。

私は、この作文を通して、給食がいかに素晴らしいものであるかを改めて感じている。私が給食を残すことがほとんどないのは、給食を作ってくくださる全ての方々のお知恵と尽力の賜物だと強く思う。

いつも当たり前のように目の前にある給食が、ここまで工夫され、私たちの健康を考えて創られているとは夢にも思っていなかった。給食に関わる全ての方々の賜物。それを毎日美味しくいただけていることに心から感謝して、これからも元気に、「いただきます。」

「給食という食育」

学校給食は、子どもたちの心と体の健やかな成長を支えるとともに食育の実践の場でもある。食育とは、単に「栄養の知識を学ぶこと」だけでなく、食べ物の大切さ、食事のマナー、食文化への理解、そして感謝の心などを育む教育である。日々の学校給食を通して、子どもたちは多くの学びを得ている。

まず、学校給食は栄養バランスの良い食事を提供することで、子どもの身体的な成長を助けている。成長期に必要な栄養を正しく摂ることで健康な体づくりができるだけでなく、集中力や学習意欲にも良い影響を与える。また、給食を通じて「どんな食材にどんな栄養があるのか」「偏りのない食事がなぜ大切なのか」を学ぶことで、子どもたちは自分の健康について考える力を身につけていく。

さらに、学校給食は心の成長にもつながっている。子どもたちは、毎日同じ献立をクラスメイトと一緒に食べることで、協調性や思いやりを育んでいく。給食の時間には、当番が配膳や片付けを行い、役割を分担する。そこでは、「みんなのために動く」という責任感や食材を作ってくれた人や調理してくれた人への感

謝の心を自然と学んでいく。

また、学校給食は食文化を学ぶ貴重な機会でもある。地域の食材や行事に合わせた特別メニューを取り入れることで、子どもたちは自分の住む地域の伝統や日本の四季を感じる事ができる。例えば、春にはたけのこ、秋にはさつまいもなど、旬の食材を味わうことで「季節を食べる」感覚が育まれる。こうした経験は、食への興味や理解を深め、豊かな感性を育ててくれる。

現代では、家庭の食生活が多様化し、子どもが家庭で十分に食育を受けることが難しい場合がある。そのため、学校給食は子どもたちにとって、日常の中で食について深く学べる貴重な場となっている。食育を通じて身につけた知識や経験は、大人になつてからの食生活にも大きく影響を与えるだろう。

このように、学校給食は子どもたちの身体や心を育てる大切な教育の一部であり、食育の実践の場である。子どもたちが「食べること」の意味を学び自分と他者を大切にすることを育てながら成長していくためにも、学校給食の役割はこれからも大切にされていくべきだと感じている。そして、私達は小学校、中学校と9年間も「給食という食育」と自然に関わり合ってきたことに私は今、とても心の中でほこりに思っている。



給食の作文 優秀賞

《一学年の部》 沼ノ端中学校 一年二組 保月 彩花

「給食について」



みなさんは、毎日どんな給食を食べていますか。日本の学校では、みんな楽しく、おいしい給食を食べることが出来ます。世界には、給食がないから、家に帰ってご飯を食べる国や、政府主導の学校給食プログラムが整備されていないため、クラス全員が給食を食べない国もあるそうです。日本の給食制度は、とても素晴らしいです。そこで私は、給食について考えることにしました。私の好きな給食の献立は、焼きそばパンです。自分でコップペパンに焼きそばをはさむ作業が楽しくて、おいしいです。他にもナポリタン、カレーライス、黒糖パン、野菜ゼリーなどもおいしくて好きです。

また、苫小牧の郷土料理給食で、ホツキカレーが出たことがあります。私は、ホツキカレーも大好きなので、給食がホツキカレーだったら、とってもうれいす。郷土料理を給食で食べられることは、地域のことを知るきっかけにもなり、とても貴重な経験だと思います。

給食を食べている中で、私は時代によってその形が変わること

もあると気づきました。二〇二〇年に新型コロナウイルス感染症が流行したとき、感染を防ぐために「黙食」がすすめられました。私は当時小学二年生で、それまで友達と机をくっつけて楽しく食べていたのに、一人で前を向いて黙って食べるようになりました。食べ物の味は変わらないのに、雰囲気が大きく変わり、少しさみしくて違和感を覚えました。この経験を通して、給食は、「みんなで食べるからこそ楽しいもの」だと気づきました。

日本で初めて学校給食が行われたのは、一八八九年の山形県の小学校でした。貧しい子どもたちに、おにぎりや焼き魚、漬物を出したのが始まりだそうです。その後、戦争や食糧不足で中止された時期もありましたが、一九四七年に再開され、栄養バランスを考えた献立へと発展していきました。このような長い歴史を知ると、給食はただのお昼ごはんではなく、私たちの健康と成長を支えてきた、大切な存在ということだと感じます。

今は、牛乳が紙パックで配られています。リサイクルしやすい牛乳瓶に戻すのもよいのではないのでしょうか。瓶のほうが味もおいしく感じられるし、環境にもやさしいと思います。給食は食べ物だけでなく、地球や未来のことを考えるきっかけにもなるのです。

これからも私は、給食で学んだことを家庭の食事にも生かし、好き嫌いをせず、栄養のバランスを考えて食べられるようになりたいです。百年以上も続いてきた学校給食が今の私たちに受け継がれていることを忘れずに、食べることを大切にしながら成長していきたいと思えます。

「給食の魅力と努力」

僕は学校が大好きだが、勉強や友達関係などで壁にぶつかって学校に行きたくなくなることもある。そんな時でも、僕の心の支えになってくれるのが、毎日十二時半から始まる魔法の時間、給食だ。

四時間目終わりを知らせるチャイムと共に献立を確認し、どれが米に合うかを考えて手を洗う。給食準備が終わり、待ちわびた始まりの合図「いただきます」の声と同時に温食缶へと歩みを進める。友達と傾け合ったりして、こぼさないよう席へ戻る。この後は主菜やデザートをかけた激しいじゃんけんだ。勝った者は幸せそうに前に行き、負けた者は悔しそうに席に戻る。もちろんそれは、僕も例外ではない。放送で流れる楽しい音楽やめでたい大会結果を聞きながら、いざ給食の時間が始まる。最初は、米に主菜や温食をのせる。

これをするので、スープや主菜のたれが白米にしみこんでからみ合うのが、もう最高にたまらない。ご飯をどんどん食べ進めていくうちに魔法のようなかけ算が現れ、そのあまりのおいしさは言葉では表せないほどで、わざわざそのためだけにもう一度おかわりしたりすることもある。そして、満を持してデザートに手をつけるのだが、その時には必ず少しだけ牛乳を残しておく。デザートと牛乳の組み合わせは美しい公式であり、一口で豪快にむさぼることもゆっ

くり味わって食べることもあるが、牛乳はそのどちらにも最高の形で作用する。時間やお腹の限界までおかわりを繰り返すので、たまには焦って食べることもあるが、自分の根性と友達の助けもあり、おかげさまでここ数年は給食を残したことは一度もない。それどころか、毎日何かしらのメニューをおかわりしている。だからおそろく、払っている給食費より得をしているだろう。

このように、僕が思っている給食の魅力の一部を書いたのだが、周りの人はその日の献立を見て、「はずれだな」などと言って落胆している人や、見た目や匂いだけで判断して一口も手をつけずに残す人だっている。確かに給食のカレーやラーメンが格別に美味しいのは分かるが、それらに限らずどんな献立も栄養バランスがよく考えられているし、味としての魅力もある。それなのに、ただだけで残すような人は、改めて考えてほしい。この裏には、苦労して食材を作る人、栄養バランスを考えて献立を考える人、その通りに給食を作る人、それらを学校に運ぶ人、たくさんのおかけで成り立っている。その思いを胸に、一口だけでもよいから挑戦してみてほしい。

給食作文の話を書いた時、僕はこの話を引き受け、給食の魅力を伝え、食品ロスや廃棄の負担を減らし、努力に報いたいと思った。学校という小さな範囲でも、ちりも積もれば山となる。この文章を目にした人に、少しでもこの思いが伝わることを願っている。



「給食がつなぐ笑顔と感謝」

毎日、昼になると教室に漂ってくる給食の良い香りに、私は自然と心が温かくなる。給食は単にお腹を満たすための食事ではなく、クラス全体に笑顔と感謝の気持ちを広げる、大切な時間だと感じている。そこには、作ってくれる人たちの想いが込められていて、私たちの日常を支えるたくさんの方の努力があることに気づかされる。

給食の時間は、クラスの皆と一緒に同じメニューを食べることで、自然と会話が生まれ、笑顔が広がる時間であり、好きなメニューだと、「今日はラッキー」などと盛り上がり、苦手な食材でも「一口だけでも食べてみよう」と友達同士で励まし合う事ができる。食べ物を通して生まれる小さなコミュニケーションは、私たちの心を繋ぎ、気づかぬうちにクラスの間を深める役割を果たしてくれている。

また、給食を口に運ぶたびに、私たちのために働いてくれる人たちへの感謝が芽生える。早朝から調理場で汗を流す調理員さん。食材を育ててくれる農家の人たちや配送を担う方々。誰かが欠けてしまえば私たちの給食は成り立たない。給食は、たくさんの方の「見えない努力」が積み重なってできているのだ。さらに、給食は命の大切さを感じるきっかけにもなる。野菜や肉、魚、すべての食材には、命が宿っ

ている。その命をいただき、私たちは生きていく。だからこそ、「いただきます」と「ごちそうさま」をする時、私たちは手のひらを合わせ、食材や作ってくれた人など、給食に携わっていたいただいた全ての人への感謝を込めるようにしている。

給食の時間を大切にすることは、ただ食べることに以上の意味がある。友達と笑いながら食べることで、人とのつながりを実感し、食べ物を味わうことで感謝の心を育てることが出来る。日々の給食は、私たちの成長を見えない形で支えてくれている。

これからも私は、給食を「当たり前」だと思わず、笑顔と感謝の気持ちを胸に、毎日の一食一食を大切にしていきたい。

給食は私たちの成長を支え、感謝の心を育てるかけがえのない時間だ。



「給食に関する標語」優秀作品

【小学校の部】

拓勇小学校 一年三組 戸崎 春仁

「四じかんめ まちきれないよ カレーの日」

清水小学校 二年一組 若狭 京志

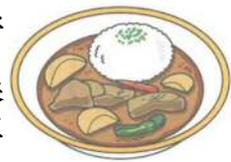
「ありがとう のこさず食べるよ きゅうしよくを」

沼ノ端小学校 三年一組 山本 祥也

「きゅう食を 作る人には かんしやだな」

ウトナイ小学校 四年五組 小泉 瑠南

「給食は 作った人の おもいやり」



ウトナイ小学校 五年一組 藤根 康祐
「作り手の 思いいっしょに いただきます」

糸井小学校 六年一組 佐々木光希

「給食は 笑顔 栄養 宝箱」

【中学校の部】

明野中学校 一年四組 野替 逞真

「給食を 沢山食べたら 笑顔がふえる」

苫小牧東中学校 一年二組 道政 夏希

「給食を 早く食べたい 授業中」





苫小牧市学校給食会

令和7年10月発行

第1学校給食共同調理場

〒053-0053 苫小牧市柳町1丁目3番5号 0144-57-5881

第2学校給食共同調理場

〒059-1262 苫小牧市美原町3丁目9番10号 0144-67-1815